

# デイリー ミラクル

ショートストーリー  
アナ・スターン著  
厚地由佳子 訳



デイリー ミラクル





「デイリー ミラクル」は、アナ・スターンが甲府に滞在中、「女の社会性」「朽ちた果実」「嫉妬や人との交わり合い」を文章とイラストによって描いた4つのショートストーリー集である。本書は才能ある翻訳者であり理解ある読者でもある厚地由佳子氏によって翻訳された。

現在はコペンハーゲンを拠点に、作家そしてビジュアルアーティストとして活動している。

デンマーク王立美術院に在学しており、展示活動や東京での短編映画制作、ニューヨークでのアートプログラム参加時に行った執筆（主に図書館にて）

等、これまでに様々な活動を行っている。  
物語、エッセイ、詩を雑誌社に寄稿し、また小さな出版社『Longetti / ロンゲッティ』の共同運営者でもある。

1994年デンマーク生まれ。一人っ子として4人の親と共に、心配されながら甘やかされた社会主義者として育った。  
意地悪い朝には執筆を、頭の冴える昼間には絵を描き、感情がほとぼしる夜には飼っているプードルを散歩しバーで働いている。

その他作品 (Expressionista Eyebrow出版)

*Woman, everyday life and water, 2018*

*Prism, 2016*

アナ・スターン  
デイリーミラクル  
日本語訳 厚地由佳子

Expressionista Eyebrow

Published in Kofu, Yamanashi, Japan by Expressionista Eyebrow

「What the water tells/はしご湯」展（甲府・高砂湯）の一部として2018年11月発行

初版

All rights reserved

Copyright © Anna Stahn

Translation copyright © Yukako Atsuchi

Photo copyright writer portrait © Yasuhiro Morikawa

Printed and bound in Kofu, Yamanashi by Anna Stahn at the AIRY foundation in Kofu, Yamanashi 2018.

本書ではマーガレット・アトウッド、村田沙耶香、多和田葉子、ビョーク、ガートルード・スタイン、フランシス・ベーコンの作品及び発言を一部引用しています。

ISBN: 978-87-970699-1-2

stahnanna@gmail.com

www.annastahn.dk

本書を、東京にいる私の友人達に捧げたい。

私の日々に命を吹き込む、すれ違ったり一瞬目が合っただけの  
名もなき人々にも。

四番目の物語「デイリーミラクル」を、甲府の草間弥生に捧ぐ。

ひとりの女とふたつの電話  
ガーデナー  
バスハウス  
デイリーミラクル



## ひとりの女とふたつの電話

真夜中。イアマはスナックとトイレトペーパーを買いにコンビニへ出掛けることにする。何時間も携帯でメールをしていたせいですっかり集中力も切れてしまい、フライパンの上のゴキブリのようにばたばたと落ち着きなく部屋中を動き回っている。携帯をチェックし、服を着替え、チェッカーボード模様のキッチンフロアを威嚇するかのよう、タバコの吸い殻をわざと落としてみたりする。

彼女は座っていた椅子から立ち上がった。目の前にはふたつの携帯が置かれ、片方が光ってメッセージの受信を知らせ、アプリがじれったそうに通知画像を表示した。時計を確認する。彼女は夜間同じ時刻に外出するのを避けるようにしている。ちょうど真夜中近くになると空腹に痺れを切らし、どうせ満たしてくれる何かを買いに行かなくてはならないのだけれど。

時刻が変わるのを待って、ジャケットと赤い手袋を取りに行った。夜になると、彼女はドアを思い切り音を立てて閉める——反逆心を見せつける！

階下へ降りて行く間、ジャケットのポケットの中で鍵、財布、そしてふたつの携帯がリズムカルに音を立ててバウンスしている。右側に手縫いで付けられたポケットには、オートナイフを一本忍ばせている。それはじっと動かず、映画に出てくる銃のように、その時が来るのを待っている。

アパートのビルを出た瞬間、数年前に実家を離れ街に移り住む時に言われた母親の言葉を思い出した。

「殺されたりなんかしないでよ！」

今の彼女がその時の自分にするアドバイスは違う。  
「いつもバーに入り浸っているような彼氏なんてつくったらだめよ！買い物中毒には気をつけて！家できちんと自炊して、手付かずの本を読んで、変な奴らからすぐに走って逃げられるようスニーカーを履きなさい！」

角を曲がるとすぐに、彼の姿に気がつく。いつもそうだ。  
今日は、彼はこちらに向かって歩いて来なかった。イアマが彼を避ける方法を見出した時、彼は彼女に近づく別の方法を見出したに違いない。  
彼は背が高く、頭が禿げ上がっている。体型はまるで柔らかい体つきをした女のそれのような、洋ナシのような形をしている。禿げた頭は通りの黄色い街灯に照らされ輝き、白い巨大な卵のようだ。イアマが踵を返し心底うんざりした顔でタマゴあたまに一瞥くれてやれば、彼は物欲しそうな顔で会釈でもするのだろう。イアマは歩速を速めて歩き出した。彼が後を付けて来る気配がする。  
店の外に人通りはないが、夜間のこの時間のコンビニは混んでいた。みな腹を空かし、この魅惑で溢れる時間帯にそれぞれの健康を害しにここに集まっている。イアマとタマゴあたまは入店し、彼女はバナナブレッドとトイレットペーパーを買い、彼は何も買わないようだ。

イアマがレジへ向かいながら後ろを振り返って見ると、タマゴあたまはポテトチップスの陳列された棚のそばに立ち彼女をじっと見ていた。ため息をつきながらレジ方向へ向き直り、大学生らしきレジ係の男のもとへ向かった。彼は端正な顔つきをしており、その肌はつるりと食生活の良さが現れている。  
「ピザをひとスライスと、警察への連絡をお願いしたいんだけど。あそこに立ってる男につけられてるのよ」  
イアマはポテトチップスの棚を指差した。  
「あの男にずっとつけられてるの、今日だけじゃなく度々ね。気持ち悪くて」  
「スナックコーナーに立ってる、あの禿げた人ですか？」  
レジ係は戸惑ったように聞き返した。

「そう」イアマは返事をしタマゴあたまに振り返った。それに気付いた彼は顔を赤くしている。レジ係はカウンターの引き出しから電話を取り出し、タマゴあたまに向かって話しかけた。

「すみません、そのあなた！ちょっとこっちに来てもらえませんか？本当にこの子のこと尾けてるんですか？」  
「この女性、ね。二八なのよ」  
そう言ってイアマは笑った。彼女を見るレジ係の顔はまだ困惑していた。

コンビニは、夜中の十二時を過ぎても不可思議な行動が簡単に目につきそして即座に流されてしまう、まさに正常な場所だ。人々はそれぞれコーヒーやアイスクリームを購入し、誰の目にも明らかなレジでのこの異常さにひとりとして目もくれない。

「ちょっとこっちに来てください」

レジ係がタマゴあたまに再び声をかけ、彼はレジまでやってきた。咳払いをし質問に答えたタマゴあたまのその穏やかな声に、レジ係の男は身体を不意打ちを食らった。

「聞いていただきたいんですが・・・僕は彼女の後を尾けていた、かもしれません・・・」  
一瞬、完全な静寂が流れた。

「どう言えば馬鹿みたいに聞こえずに説明できるか・・・えっと・・・」

そう言い、タマゴあたまはイアマを指差した。

「彼女は、そう、携帯をふたつ持っている。ということはつまり・・・あの、僕の言っていること分かりますか？」

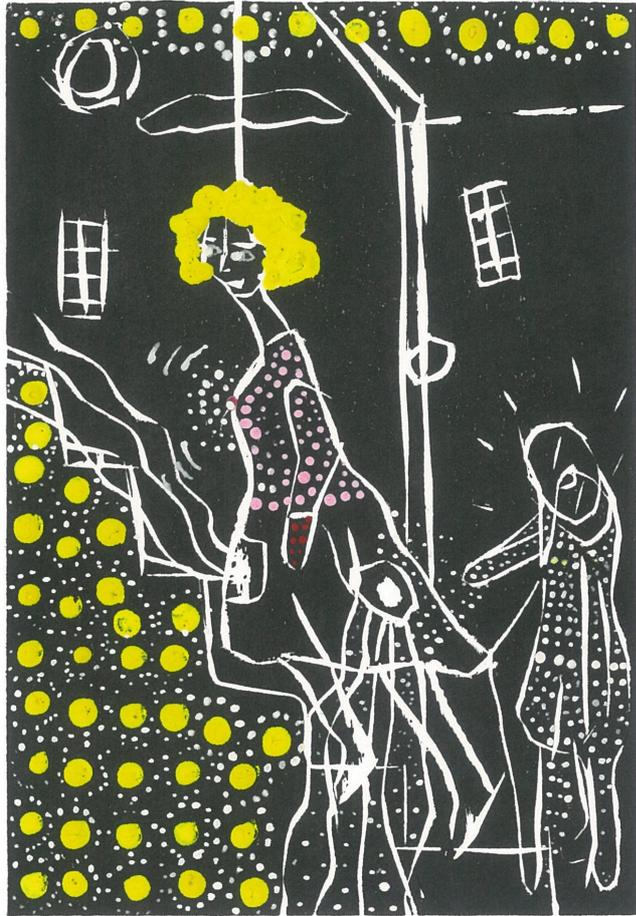
レジ係はイアマを見やり、ピザひとスライスを彼女に手渡した。

「携帯をふたつ？」

彼はタマゴあたまに聞き返した。

「ええ、そう。ふたつの携帯、ということは彼女にはふたつのアイデンティティが存在している。こうして今あなたは、その表向きの方の彼女と向き合っているんです！」  
タマゴあたまは言い終わるや否や、イアマの頭のとっぺんからつま先までじろじろと眺めた。

イルマが代金を払うと、クレジットカードは持ちでないですか？とレジ係が訊いた。



「ひとりの女にふたつの携帯。言ったでしょう」

タマゴあたまはそう言い、笑みを浮かべている。

「お願いだから警察を呼んでちょうだい」

イアマはため息をついた。

レジ係はしばらく立ったまま動かず、何か考え事をしていた。

「でも・・・、どうして携帯電話をふたつも持ってるんですか？」

レジ係は質問し、イアマは釣りを受け取った。

「で、電話するの、しないの？」

イアマは見つめてくるレジ係の表情から彼が何を考えているのか読み取ろうとしていると、タマゴあたまが自分のポケットからふたつの携帯を取り出し誰かに電話をかけ始めた。そしてそのふたつのスクリーンをレジ係に向けて見せた。

「ご自身で確認してください、ふたつの携帯番号だ」

すると、イアマのポケットのふたつの携帯が鳴り出した。彼女は店のドアへ急ぎ、そして思い切り音を立てて閉めた。タマゴあたまはその後を走って追いかけた。

店内には安堵の波が広がり、空気は正常さを取り戻した。

タマゴあたまはイアマが逃げ急いでいるのをすぐそばにある狭い路地の駐車場で見つけた。彼女は猛スピードで走っている。運動慣れしていないタマゴあたまは唸り声をあげながらやっとのことで彼女のスピードに追いついた。

「イアマ、美しい君よ、どうか待ってくれ」

彼は小さく弱りきった声で言った。

彼女は立ち止まって素早くジャケットの手縫いポケットのボタンを外し、隠し持っていたオートナイフを開いて振り返り、タマゴあたまの目を見据えた。

「近づくな、名前もないケダモノが」

そう言った声は力強い。

タマゴあたまは飢えた目つきで彼女を見た。

「あっちへ向かって歩きなさい」

イアマはナイフで自分の前方を指した。

「私はここに立ってるわ」

男はナイフをしばらく見つめていたが、静かに肯き、そして指示された方向へ歩き出した。イルマはその間待ち、いつもとは違うルートを通過して家を目指し、歩き始めた。

家に戻ると、彼女はコンビニでかかってきたふたつの不在着信番号を着信拒否に設定した。風呂の湯を張る間、キッチンテーブルでピザを食べ、顔パックをして音楽を聴いた。

風呂からあがってブランケットで身体を包むと、イアマはキッチンの椅子に座り直し再び携帯でメールを始めた。ふたつの携帯を交互に巧みに扱い、ほとんどふたつ同時に操作している。

携帯画面に映し出された写真の中で、彼女は紅葉色の赤いウィッグを被っている。どちらかの携帯にはまだメモリーに空きがある。イアマにはできるだけ多くの空き容量が必要だった。



## ガーデナー

カボチャの季節になった。夜が完全な黒と化し、月はかっちこちに凍ったバナナのように白くやせ細るその季節！それは同時に栗の季節でもある。庭中に飾り付けた豆電球が黄昏の中で輝く。洋ナシは落下し、その肌は茶色く腐食してリンパ腺のように

動く。それは落下し壊れる瞬間、小さく無垢な声で私に叫ぶ。ママ！ママ！熟れさせて！熟れさせて！

赤と黄色の葉がそこら中に散らばり、秋の庭に萌え出した芝生と化している。私は洋ナシを集めて庭を走り廻る。プラムが私の足下で砕け散る間に、庭は暗闇の中に霞んでいく。その汁はぼってりと濃厚なシロップのように音を立てて芝生に垂れる。空気が冷たい。暖かい。いや、やっぱり冷たい！農業と有機的香りと不気味さが一緒に溶け込み漂っている。

私たちの畑は実用的だけれど、自宅栽培にも肉を叩くブッチャーブロック台にも土で黒くなる爪にも血液中毒にもブラッドソーセージに自家製干しぶどうにも全て、私はもう飽き飽きしている。

私は子供のように早寝早起きだ。眠れない時は、悪魔が靴に足を通す前に私を再び起こしにくる。（彼はリビングのストーブの上で靴を暖めていたのだ。）緑色のカップに注いだ熱いコーヒーを飲みながら、暗がりの中で私からキスを奪うことはもうない、隣の家に住むティーンエイジャーの娘に夢中になっている夫をちらりと見た。

その少女の髪は、彼の心を彷徨う魂のように焦げている。彼の心は焦げている、私にははっきりと分かる。夜になると彼は、落ち葉で覆われた庭に立ち何時間もタバコを吸う。そうして真夜中を過ぎるとベッドに潜り込む。私はキッチンに立ち裏切り味のまずい唾をシンクに吐き、庭の洋ナシの木を眺める。彼らは私の心を鎮ませ、私は再びその実を収穫しに外に出る。

工作中、古くて憫然な車に乗って街へ向かう夫を思う。彼は自転車に乗った女の子達をゆっくりと盗み見しながら、できるだけ長くその視界を保とうとしている。帰宅すると彼は私の家事の手伝いをする。湿った庭にふたり分の洗濯物を干し、それはまるで彼の破滅的行動に対し揚げられた旗のようにぶら下がり、決して乾き切ることはない。

私は少女の母親に箱詰めされた野菜を配達する。今週は栗とイチジクとカボチャと洋ナシ、そして豚肉の細切れ入り！あの娘はほとんど何も食べないはずだ。こんなことは言えないけれど私は密かに、彼女が焚火の中に入って燃え尽きてしまうか、そうでなければ私たちの畑から種を食べる鳥達が彼女のストッキングとスカートの間、その肌を食べ始めてしまえばいいのと思っていた。

夫が出かけているある日の午後、少女は私たちの家の近くまで来た。彼女は庭のフェンスに寄りかかりながら間抜けな笑顔を向けこう尋ねてきた。

「果物を育てるって大変なのでしょう？」

その声には私のかすれた声にも銀メッキみたく錆ついた髪にもない可愛らしさがあった。何をしようとしているのかしらこの娘は？



「そうかもしれないわね。でも私は充分強いみたい。あなた、もうちょっとマシな時間の使い方あるんじゃない？一日中そうして私を見ているつもり？」少女は素早く走って逃げてしまった。

この若い少女の髪にも動きにも、可愛らしさがあった。落ち着いた雰囲気ではあるが、その下層にはリスのようなあくどさが横たわり彼女の持つ全力の劣悪さと意地の悪さで人をその世界に誘い込む。それにはどこか農作業の持つ力と似たものがある。

農作業に潜む力。魔法の力で毎年イチジクやキノコを私の庭に召喚させる力。その力は疑いようがない。毎朝新たなイチジクの実が、小さな木にぶら下がる紫の鞆丸のように色付く。

私の指の爪に潜む力。地下世界のように真っ黒。森の湖ほどの深さで地平線を望む私の瞳の中にも、力は潜んでいる。

穴やシミだらけの緑色と茶色の私の仕事着にも潜んでいる力。顔を覆う空のようなたっぷりとした私の髪にも力が。かつては花畑のように咲き乱れ、今では輝きを失いかけ死に向かっているあの服にも僅かな力は残っているし、パーティーの度にいつも着ていたアプリコットシェード色のドレスと黒いレザーパンプスのあの寂しいセットにだって力があるのだ。服は庭と薔の匂いがし、可愛らしさは微塵もないけれど、微かな力がまだ宿っている。

子豚が生まれる時、手際良くその子豚達を母豚から引っ張り出す私の姿には力がある。大きく太ったイチジクから生命というジュースを絞り出す私の姿にも力がある。そして涙を流すことを許し認めるためにそのローズヒップの香を舐める私の仕草にさえも。

言葉にできずぬ囁きを我に語りかける私の姿には力が潜んでいる——かわいいあなた。たったの14年。でももう飽きてしまっているんでしょ？

夜になると私は眠らず横たわり、庭で果実が落下する音に耳をすませ、遠い昔こんなベッドタイムにも甘い時間が流れていたことを思い出す。かつて街に住んでいた時、同じようにしてこうしてベッドに横たわり、安心と暖かさに酔いしれてばかりで危険に包囲されていると私は気付かずにいた。あの、甘さを。





## バスハウス

中に入ると私たちは黒いプラスチック素材で編まれた細身のスリッパを渡され、腕には幾枚ものタオルがかけられた。ここで働いている少し威圧感のある女は私たちの腕を引っ張り「静かにして！」と注意を促し、私たちは暗闇を通り抜け、赤いライトと洒落た木製のロッカーの置かれた蒸気で湿った更衣室へ連れられた。

服を脱ぎロッカーに鍵をかけると、その鍵は茶色いプラスチック製の箱に入れられ、私たちは自分達の脂肪のついた腹部とアーモンド型の目元を気にしたり夢中になったりしながら鏡の中の姿を注視した。鏡に向かってポーズをとっていた私の太腿に風

風呂の女がタオル鞭を一発食らわすまで、ありとあらゆる角度から全身を観察していた。「静かにして！」私は我に返り、星の形にできた حمام（トルコ式銭湯）に入っていく彼女の後をついていった。

バスハウスは幻想であり、軀を清める神殿であり、そしてゴシップクラブでもある。フロアには茶色と黄色の陶器質タイルが敷き詰められ、 حمامの中央には御影石で造られた黒く滑らかな星型のテーブルが置かれている。そこでは女という生き物の全てを知り尽くした حمامで働く女たちのその手により、四人の客人が軀を磨かれている。

壁際には手洗い場と待合室があり、バラの蕾の香りのするアロマソルトが置かれ、男性歌手がファルセットで歌い上げるディスコ音楽が大音量で流れている。客人たちは、ビキニとプラスチックで編まれた上履きとアクセサリーで隠された以外の部分を晒している。

一方で風呂屋の女たちはTシャツに柔らかい素材のショーツという恰好で、オイルの入った小瓶と手袋の詰まったバッグ、それと動きやすい服にその他数足の頑丈そうな履物が詰まったバッグを腰から提げている。彼女たちは私たちに軀を洗うよう指示し、蒼い目と細い髪を持つミルクのように肌の真っ白な私たちを見て笑った。私たちは気後れしつつ笑い返し、泡風呂へと誘導された。

泡風呂には花嫁がひとりと彼女の友人たちが入浴していた。彼女たちの胸は月かアーモンドのように長く丸い形をしている。花嫁の瞳はこれから語られる話への喜びのため光り輝いている。私たちグループの目はこのもう一組のグループへの関心で光り輝いていた。私たち全員が互いをチェックし合っている。五感の鋭い触覚もしくは暖かな土壌に咲く春の植物かのように、耳を大きく開き彼女たちの話に耳を傾ける。女は他の女に一番興味があるという事実には誤解があり、その興味は敵対意識そして憎悪によりもたらされていると考えることにも誤りがある。

ということで、私たち女はゴシップ話を！だけど、ゴシップも噂話も悪いことというわけではない。寧ろゴシップ話をすることは由緒正しきストーリーテリングの一種だ。そこには見られても口にされることのない秘密が潜み、歴史の汚れたポケットに収められた声にならない会話がある。物語は誰にも伝えられず、それでも大事に大事に蔵われている。ゴシップには神のご加護がある、子を産み落とした時あなたの背中を支えてくれた女性のように。

だから私たち女は大騒ぎ！私たちだってゴシップ話で盛り上がりたいけれど、一体



何をどうゴシップしたらいいって言うのかしら？他人の話でもして湯船の中で互いにお近づきになりたいと願っているのに。

そうするには私たちには難し過ぎたので、顔に水をぶっかけるために冷水をもらいにいった。すると私たちはザクロのスラッシーを手渡された。赤いドリンクを片手にまたタオル鞭を食らうと、私たちはスチームサウナへ連れられた。サウナの中は滑りやすいし、息が苦しい。それに比べ軀は、スチームの中で育ち弾けるさやのように柔らかく呼吸をしている。そうしてやっと私たちは男や馬鹿げた出来事についてあれやこれやと話を始めた。言っていることが正しかったりその内容に驚かされた時は、パチンと指を鳴らしたり舌を指で押さえたりもする！それが終わってしまうと、誰ひとりとしてサウナで話した話の内容を覚えていない。ただ室内の空気の濃さと濃密な会話があったことだけを記憶している。

サウナを出ると私たちは、ビキニの女たちがパン生地みたく撫で回されている星型のテーブルの辺りで待つように言われた。彼女たちの大きな胸は叩かれたり伸ばされたりサイドに落ちたりしている。すぐに私たちの順番が回ってきた。待ち望んだ興奮と多大なる怯えよ、いざ！その時ひとりの客が私たちの前に割り込もうとしたけれど、びしっとした係が彼女を元の順へ戻してくれた。この女は常連か恥知らずのどちらかに違いない。(だってそうでしょ?!)ハمامの中には風呂屋の女たちはいなかった。彼女達はこのお風呂工場で働いているだけなのだ。

近くに寄って見てみると、彼女たちの母なる軀のいたる箇所に細かい筋肉が張り巡らされていることに気付く。その筋肉は押ししたり引っ張ったりこすったりという動きからつけられたものだ。彼女たちは片手を脇腹に置き、客の軀を引っ張り見事にストレッチさせる。ベルトバッグからウォーターボトルを取り出し一口含み、手袋を着けた手で額の汗を拭う。そうして再び私たち客——つまり最安値しか払わないくせにその代価を根こそぎ得ようとする女たち——のマッサージへ戻る。

私を担当している女が仰向けになっている私をオイル漬けにする時に、彼女のその手はジョークを飛ばす。私の滑りやすくなった軀をよじってくねらせ、まるで魚のように台の上で前後に揺さぶる。私は笑ってなるべく重心をずっしりと保とうとする。

レモンのように絞られ、元の位置に戻された。私はひっくり返って寝そべったまま思考を停止させている。私の肌は軀から分離され、細くて黒い糸の中に落ちていく。頭の向きを変えて乾癬を持つ友人の方を見ると、彼女の肌は黒い雪のようで、落ちたり引っ付いたりを繰り返している。すぐに肌の層はグローブのように厚くなり、彼女を揉みまわしている風呂屋の女は息をのみ、同僚を振り返りこう叫んだ。「見てよこれ！止まんない！」

それが終わると私たちはスポンジにたっぷりと含まれた泡を注がれ、私はアラビアディスコのサウンドトラックの中へと再生された。花々の欠片たちが私たちの肌へ貼付き、私は乳首からバラの花びらを取り除く。

私は青いタイル貼りの小さな部屋でシャワーを浴びた。髪を洗う時に浴場に置かれている科学合成物でできた緑色のシャンプーが目に入った。目を真っ赤にさせながら、

私は巨大なクロワッサン型のソファと大きな液晶テレビのあるラウンジルームへ出た。

私の友人たちはすでにソファに座り、花嫁とその友人たちと話をしていた。彼女た



ちは笑いタバコを吸いザクロのスラッシーを飲んでいる。ナッツとキャンディを食べて口紅を塗り、目をぎょろぎょろさせている。花嫁最後の独身パーティー。隣には彼女たちのフィリピン人オーペアベビーシッターが座って大げさなグランマお節介やジョークを言うものだから、みんなしてそれに笑っている。

私の耳には彼女たちの言葉遣いが棘のある陰謀に満ちたものに聞こえた。彼女たちの口に納まっているその舌は彼女たちのものであり、同様に私の話す言葉は全て私のものだ。知識と感情と時間と私の食べるもの、それら全ての寄せ集めでできている。他人の影響下そして他人の支配下でさえ、子供の時分に耳にした言葉、私の口から放たれ消えていく言葉は全て私のものであり、彼女たちの言葉だって同じことなのだ。

私たち二組はお互いに上から下まで眺め回した後、ちょうど会話を盛り上げようと誰かが英語で何か言おうとしたその瞬間、私の友人が手に持っていたザクロのスラッシーを私の脚の間に零してしまった。（私のタオルが真っ赤っか！）

白い分厚いタオルの上の液体はまるで、白地の真ん中に赤丸の浮かんだ日本の国旗のようだ。

ヨルダンのように、日本もバスハウスが有名だ。日本では銭湯か温泉の二種類がある。その違いは水質にあって、温泉はミネラル豊富な滑らかな重水で、銭湯は水道水を使用する。違いはあれど、優雅な土曜日を過ごすにはどちらも十分に価値がある。

日本のバスハウスは、狭いアパートでお風呂場になんてスペースを使っていられない大きな街にはぴったりのシステムだ。そして日本人の健康志向にも合っていると思う。男女それぞれ浴場が分かれていて、その間を仕切る壁はタイルや富士山の絵——同じ自然界に属する姉妹達をも呪い負かせてしまったやきもち妬きな山——で装飾されている。

だけど、温泉では女たちは互いに競い合うことはない。ハمامのように女の社会性や審美性も存在している。そしてもちろん披露と比較も！それでも温泉は個人性という構造と、日常に存在している構造とはまた違った構造を包含している。

私は模範ともなるような最高の一日の過ごし方を発見した。六杯の水、仕事、素敵なランチとお風呂。だから私は日本にいる間、時間とお金の許す限りなるべく温泉もしくは銭湯に行くことにしている。

八月も終わる東京でのある夕方。その晩の気温は暖いくらいだった。長い長い仕事を終えた一日の終わり、男友達と一緒に銭湯へ入った。私はキャップに薄っぺらい青のスカートを履いていて、銭湯の番台はぱっと私のことを見て男だと勘違いした。チケットを買って女風呂の暖簾をくぐろうとすると、彼は立ち上がり私に向かって叫んで止めようとしたの！共通言語を私たちは持ち合わせていなかったけれど、突然私にはあるアイデアがスイッチをオンするかのように浮かんだ！私はバナナみたいな自分の胸を掴んで笑ってこう言った。

「ジョセイ！アイ アム ア ウーマン！」

番台と私は気まずく笑い合い、私の何倍も状況に気遣う私の友達は首を横に振った。

私と友達は別れ、彼は左へ私は右へ進み、男と女と書かれたそれぞれの暖簾奥へ消えた。脱衣所の中では、日焼けして肌黒な女や大理石のように白い肌の女、漆黒やオレンジ色に染まった髪的女たちが服を着たり脱いだりしていた。石鹸に匂いと丸いお尻や皿のように真っ平らなお尻、そして立ち入った話をするささやき声が充満していた。

私は友達のことを考えた。彼は夢中になって男性の心と軀で溢れた官能的世界を堪能しているかしら。壁の向こう側で、彼はその景色と状況を楽しんでいるだろうか。男湯はどんな雰囲気なのか気になる、こっちと似ているのかしら。その答えを導き出すにはあまりにも無知過ぎるし、今まさに私自身もこちらで浸り込もうとしている状況に全集中を奪われていてそちらに頭が回らない。私が日々従っている多くのルールは私自身によって作られているものだ。けどここでは何をすべきなのかについてはこの場が厳密に提示しているし、私は進んでそれに従う。

服を脱ぎ持ち物を古い木製のロッカーに入れる。さあ、始まり始まり。小さなプラスチック椅子とお風呂セットの入った湯桶。しゃがみ込んで青い印のついた蛇口をひねる、これは冷たい水。そして赤印の蛇口から熱いお湯を出し、それを頭からざぶり！

私たち女は、座って繰り返し繰り返しこの動作を行う。みんなそれぞれ鏡の前に腰掛け、ふたつの蛇口（赤と青）をひねる。一度だけ間違っただけで百歳の老女の椅子に座ってしまったことがある。その時はルールも知らなかったのだ。それ以来二度とあんな恥はかいたことがない。

私の周りでは女たちはすでに熱湯プールの中に入浴していた。数人は眠りこけていて、数人は粘土か酒粕のフェイシャルペーパーマスクをお化けみたく顔に引っ付けている。

あああ。あったかあい。

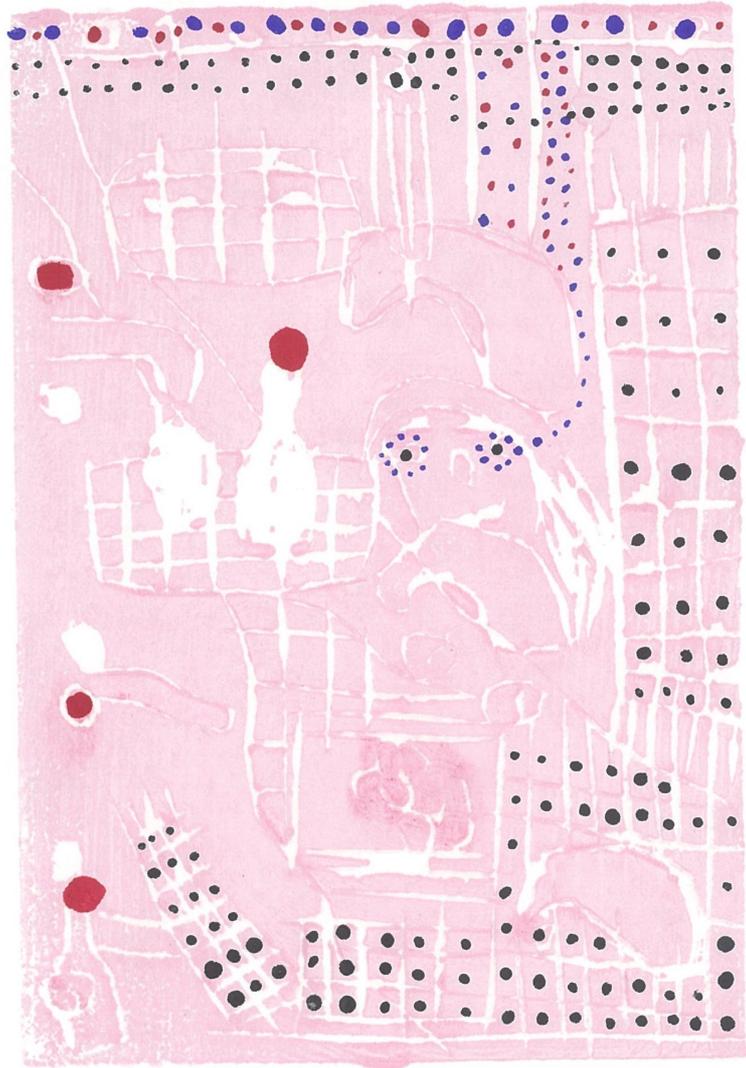
お湯の中へずんずん進んでいくと、私の肌だけでなく臓器も筋肉もストレスも全部がまるっと癒されていく。まるで魂とか周りの客の女たちが、私に向かって「つかまえた」と囁いているみたい。お湯は私を哀愁で飲み込み、ばらばらに壊し、そして私はその感覚から逃れられない。

これを繰り返した。赤と青の水道水で軀を清め、暖かなミネラルの中に沈んでいく。もう沸騰しちゃっているみたい。風呂の中で膝あたり、歪んだうすら笑いを浮かべている餃子のように丸い女がこちらを見た。水風呂に浸かっているふたりの若い女子たちが、長い間珍しいものを見るかのように私を観察している。違う水温に軀を晒すと、自分の個性さえもばらばらに壊れていくような感覚で私はだんだんと真っ白になっていく感じがした。

死んじゃうのかしら？

風呂から出るとタオルを腕にかけた。日本製のタオルはとても軽くて、何かにひっかけて干すとそのタオルはたちまち風を掴まえはためき、そしてあっという間に乾いてしまう。脱衣所で軀を拭いて服を着て保湿クリームを塗って体重を測り髪を乾かして、スナックを買う——ミルク。

湯上がりにミルクを飲むこの儀式は50年以上も前に日本で始まった。多くの客が家風呂の代わりに銭湯を使うのはいいとして、でもどうしてミルクだったのかしら？ 脱水を補うためだということは理解できるけれど、ミルク会社がこの小さな冷蔵庫の



スポンサーでもしたんだらうか？

冷たいミルクを買いに外に出た。ミルクアレルギーの友達を買わない。日本の昔ながらのミルクにはチョコレートやバニラ、ストロベリーにコーヒーフレーバーがある。ミルクは、日本ともうひとつのバスハウスがある私の故郷——乳製品大国デンマーク、その他にもミルクのように色白な女の子たちだったり、真夜中色に焼け御影石のように重いデーニッシュブレッドも有名——との架け橋だ。

故郷のバスハウスでは、大抵風呂の横にはエクササイズができるスイミングプールがある。デンマークのプールは、豊かさと社会主義とプチブルジョアを物語る。

バスハウスはスポーツスタジアムの付近にあることが多く、ギリシャ彫刻のキャスト陣、水遊びを楽しむ柔らかな腹と力強い腕をした白い女や、仕事に戻る前に息抜きにひと泳ぎする準備ができている平らな軀にストライプ柄のホットパンツを履いているアスレチック姿の男の絵などが緑と白で描かれ飾られている。

プールではスポーツウェアを着た人々が働いており、政府や何かしらのクラブや何かしらの団体によって経営されている。

数年前の夏、私と私の魅力的な妹はアイスランド出身の赤髪の少年に同時に恋をした。彼は私たちふたりと遊ぶだけ遊ぶと、最終的に妹は彼を奪い、彼も彼女を選んだ。

私は足に小さな棘が刺さった雌ライオンのように傷ついた。終いには彼は妹をふって、私たち姉妹は気まずい関係から逃れることができた。だけど私たちはひとつだけ、この少年から得たものがある。彼は凍りつくようなデンマークの冬の間、暖かな水の上に横たわるためだけにプールへ通った。

だから、私と魅力的な妹は一緒にスイミングクラブを作ることにしたのだ。

私の国の過酷な冬の中で憂鬱さを癒せる場所。そこでは互いに励まし合い、一緒に長風呂をする。だって、孤独を愛することは簡単すぎるのだから。

## デイリーミラクル

金金ばかり言って幸せを買えなかった人達は、買い物すべき場所を知らなかったのだ。例えば、朝食においていちばん混じりっけなしの幸せを確実に買える場所を彼女

は知っていた：パン屋。彼女は絵を描き始める前の朝8時に、美味しいパンを買いに行く。何もしないために早起きする日曜日以外の毎日。

私たちは芸術家としての幸運がつくようにと、彼女をマリエとかアイアといった有名な名前と呼ぶ。

アイアは起床し仕事着の服と靴に着替え出掛ける。先生の家での一日は静けさに満ち満ちているから、彼女はヘッドフォンのボリュームを大にして覚醒していく街を歩きながら音楽を聴く。

コンビニの駐車場はコーヒーを求める客の車や、朝6時からアスファルトをばりばりと引き裂き続けて何か新たな建物を建てている工事現場の人々で溢れている。

彼女は橋を渡り、一瞬立ち止まる。大きなオレンジの魚が海辺の端のほうにある海藻の茂みのそばで動いた。黒い亀が岩の上に腰掛け、朝の陽光を楽しんでいる。アイアは振り返り白いクレーンが日光浴をしている橋の反対側を見やった。橋の上では車が早朝で渋滞しており、街がホワイトノイズ満たされていた。彼女はのんびりとしたこの生き物たちと猛スピードで走る車たちを描く。そのふたつの存在はコンクリート一枚で隔たれ数メートル離れたそれぞれの場所で、全く異なる心理状態とテンポで生きている。

彼女はパン屋に向かって歩き続ける。その小さな木造のパン屋は、朝早いにも関わらずすぐに売り切れてしまう。彼女はソーセージロールパンとメロンパンをそれぞれふたつずつ買う。代金を払い釣りを受け取ってポケットにしまう。お金はいつもその定位置なのだけれど、ポケットだけが変わっていく。金の話をするためだけに、そこにある。

気さくそうな女店員がパンの入った袋を手渡し、アイアに向かって暖かな笑顔を向けた。その一連の出来事は彼女にあることを思い出させた——まず初めに先生は「私にとっての生き甲斐は、毎日に奇跡の欠片が散らばっているってことなの。そしてその欠片はちゃんと私に降ってくる」と言った——アイアは、今自分が手にしているこのバッグにもパン職人の奇跡の欠片が入っているのだろうか、と思った。

彼女は郊外にある先生の家に向かって歩く。駅の向かい側の線路沿いの郊外住宅が立ち並ぶ丘を446段の木の階段がある山の森に着くまで上がっていき、茂みの辺りを目に蜘蛛が入らないように注意して横切ると、そこが先生を家の庭へ入る入り口だ。

先生の庭をどう説明すればいいのかしら。そしてその家も、もう本当にすごいんだから！画家とか作家の家を訪ねたことはある？例えば何かものづくりをしていたり、ゴミで彫刻を作っちゃうような人の家とか。

決して綺麗とは言えないし、それどころか内でも外でも身動き取り辛かったらありゃしない。でも、モノで溢れて華やかな彩色で描かれているその空間はとても美しい。その場所に潜んだ秘密や様々な所持品、隠された手紙や長旅の末にスーツケースに詰め込まれた土産品の数々、そして中途半端だったり完璧に仕上げられた作品たちが良い味を出している。それぞれの絵に封じ込められた時間の中に魅力がある——ステータスにも年の若い妻たちにもデザイナー家具にも頼らない、神聖なる塵のように煙った壁紙の中に眠る時間。

例えば、庭には一列に彫刻が並んで立っている。それらは様々な用具だったり日々の糧やぴりっとした空気から作られている。そのどれもが、奇跡の欠片たち。

アトリエの中はひっちゃかめっちゃか。庭にある風呂場は近いうちにモザイク調に

作り替えられる予定になっていて、今は壊れた陶器類の墓場となっている。そのせいで先生は何週間も風呂に入っていなかった。

作業場としてではなく二次的生活場として残されているのは、トイレと書籍と雑誌の棚の間に無理矢理置かれたシンク、廊下から登って入るようになっているベッドスペース、そしてふたつの空間に分けられているキッチンだ。ここにはウールで覆われているキッチンベンチの二席と、ふたつの皿とティーカップを置けるほどの小さなテーブル、ガスストーブの傍にあるさっぱりと空っぽな空間にシンク、そして食べ物やお茶を漆塗りのトレイに準備するためのキッチン台がある。

アイアはガスストーブの上でお茶を沸かし、漆塗りのトレイにパンを乗せる。先生はベッドルームから出てきてキッチンベンチに座ると、彼女が朝食を出すのを待っている。

ふたりの女は、仕事前にソーセージロールパンとメロンパンを食べ、濃いめのブラックティーを飲む。朝の先生は少しご機嫌ななめなので、彼女たちはほとんど会話をしない。午後になると、先生は話すのを止められなくなる。先生はパン屋のプラスチックバッグに手を伸ばした。

「本当、これかわいいわよね！小さな顔までついてるわ」

彼女はキッチンシンクの台に置かれたノートを取り、片手でプラスチックバッグに描かれているスマイリーのロゴを描き、もう片方の手でプラスチックバッグをさすっている。

「私がかわいいもの大好きなこと知っているでしょ？でもそれがプラスチックとセットになっていることなんてほとんどないのよ」

彼女は絵を描くのを止めてお茶の最後の一滴を流し込んだ。「さ、はじめましょうか」

ふたりは、エプロンが壁にかかった先生のお気に入りのデスクがあるアトリエに移動した。先生はチェッカーボード柄のエプロンと二本の細いブラシを取り、赤色と真夜中のように濃いダークブルーの二色の絵具を選んだ。アイアもエプロンを着けた。注意しながらほとんど目に見えないほどに薄いシングルペーパーを取り出した。ふたりの女はその紙が清潔な緑色をしたデスクに無事着地するまで息を止めてその様子を窺った。

先生はアイアにアドバイスした。「一度に一枚ずつね。何があるかわからないから」

先生はブラシに赤色の絵具をとり描き出した。始めは左の角から輪郭を描いていく。彼女は女が溶けていく光景を描いている。赤い乳首がだんだん大きくなっていくそこで、先生は真夜中のように濃いダークブルーをブラシにとった。数人の女たちが体操をする姿や夕食が振る舞われている部屋が描かれた。小さな動物達が窓を覗き、その中では女が食事をしている。その他にも花柄ドレス、むき出しにされた下着、二人の女が喧嘩している様子が描かれていった。先生のスタジオの壁には似たようなデッサンや絵画作品がかけられている。いくつかは彼女が描いたもので、その他は友人たちからの贈り物やリサイクルショップで手に入れたものだ。

先生はもう一度赤い絵具をブラシにとり紅い口を描いた。そして鉛筆に持ち替え、眉毛と目を描いた。最後に背景をつけるとそれはみるみるうちに広がっていき、モチーフ全体を占領し始めている。アイアは確かではないけれど、その背景が描き切られた時確信した——これが奇跡の欠片だ。

「きたわね」先生は言った。

「ほらね、言ったでしょ。その欠片はいつでも思うより早く降ってくるの。もう帰っていいわよ、かわいい私の生徒さん」

先生は真面目な顔をしてそう言った。その顔には皺が刻まれ、茶色い目をしている。そして突然破裂したかのように笑い出した。

「ごめんなさい、冗談よ。さ、あと二枚、紙を用意してくださいな」

